

日本の花菖蒲を訪ねて

オーストラリアアリス協会 バーバラ・レヴィー

日本花菖蒲協会 三輪 昇 訳

オーストラリア ニューサウスウェールズ州のアリス協会会報でダイ・コックスさんが呼びかけた小さな記事が私の目に止まりました。「6月にダイと彼女の友達マフィが計画している日本への花菖蒲を見に行く旅に誰か参加しませんか？」というものでした。私は直ちに心を決めました。花菖蒲についての私の知識といえば、私が鉢で育てている薄い青と白の花弁の波打った品種ですが、最初に購入した株を庭植えにしたところ枯れてしまい、再挑戦の結果、夏場は池の中で、冬越しの休眠中は水から揚げればちゃんと育つということを知りました。

それから数週間、旅の計画を立てるための諸準備作業、取り分け最近日本に行った経験のある友人・親戚等からの情報収集でしたが、特にインターネットを通じて実に多くの情報を得ることが出来ました。ダイさんが日本花菖蒲協会理事長の清水弘氏とEメールで連絡を取ったところ、同氏のアドバイスもあり旅の計画が出来上がりました。東京を基点として列車等で1時間程度の距離にある主要な花菖蒲園を訪ね、新幹線で京都に向う途中、掛川の有名な加茂花菖蒲園を訪れるというスケジュールです。

訪日初日、成田空港に着いた私たち3人は時間を無駄に使わないため、旅荷物をコインロッカーに預けて、直ちに佐原に向けて列車に乗りました。佐原は成田空港からほんの数キロメートルのところにあります。インターネットの情報では佐原水生植物園では目下、花菖蒲祭りが行われているはずでした。同園のウェブサイトによれば400品種150万株の花菖蒲と300品種以上の蓮が育っているとありました。佐原駅裏の会場行き特設バス乗場には外国人女性達（私達）だけが、雨風の強い中、雨除けの奇妙な格好をしてバスを待っていま

した。祭りがあろうがなかろうが、このような荒天の日に花菖蒲を見に訪れる人はいないでしょう。バスは来てくれました。もちろん、ガイド嬢付でした。しかし残念ながら英語が通じず、彼女はDVDで佐原のハイライト情報を見せてくれました。バスは誰もいない広大な駐車場で私達を降ろしてくれました。園の入口に設けられた多数の露店に客の姿はなく、降りしきる雨の中でとても侘しい有様でした。ゲートを入ると、そこには多くの曲がりくねった水路に囲まれた花菖蒲畑がありました。実に多くの花菖蒲がありましたが、殆どが蕾のまま、花開いているのはほんの僅かでした。天気の良い日には多くの花見客を乗せて水路の中を案内するであろう小舟が舟着場に繋がっていました。園のスタッフ達はわざわざ遠い国からやって来た花菖蒲好きの私達を喜んで迎えてくれました。大変親切にもてなして頂き、土産に花菖蒲の種をプレゼントしてくれましたが、残念ながらシドニーの税関で即座に没収されてしまいました。佐原駅まで大雨でぬかるんだ道を進む貸切(?)バスの中で、ダイさんは旅の時期が早過ぎたのではなかったのかとしきりに悩んでいました。但し、数日後に清水弘氏にお会いした時の話では、佐原の花は比較的開花期が遅いということだったので、今回の旅での第1番目の訪問地としたことが間違っていたことが分かりました。

大風雨は私達の訪問の2日目には収まりました。私達は東京で2か所の有名な庭園を訪れました。まずは東京駅からわずか2ブロックで庭園入口に至る皇居東御苑です。石垣に守られ白鳥の泳ぐ広い濠を渡って入ります。天皇・皇后のお住まいである皇居に隣接し、シドニーのイーストガーデンと同様に完璧に手入れの行き届いた庭園です。次は皇居から数キロ離れていますが、東京都心に位

置する明治神宮です。広さ 175 エーカーの常緑の木々に囲まれた神宮の森は 1920 年神宮が設立された際、日本全国から 120,000 本の木々が奉納されて出来たものです。1945 年戦火で消失しましたが 1958 年に再建されました。花菖蒲園は明治天皇が皇后のために設計されたと言われています。



・・・明治神宮花菖蒲園の写真・・・

第 3 日目、列車で東京から南西へ約 1 時間、鎌倉へ行きました。源頼朝によって 1192 年に創設された武士による政府、幕府の初の都です。80 以上もの歴史的な神社仏閣がありますが、私達の目的は禅で有名な非常に簡素な美しさを持つと言われている明月院です。6 月上旬、明月院の後庭にある花菖蒲園は一般に公開されていました。アジサイ寺としても有名な明月院のアジサイは寺の側の道沿いに植えられていました。寺院建物を抜ける薄暗い小路を辿りながら、その先にとっても魅力的な庭園があるだろうとの予感がありました。現れたのはモミジや他の日本固有の木々の植栽で充たされた小高い丘や土手に囲まれ、青・藤色・白などの花々がまるでタペストリーのように植え込まれた満開の花菖蒲園でした。小路や遊歩道は訪問客達を迷わせるよう端からあるいは交叉しながら配置されていました。この庭をお寺の広間でお茶を頂きながら観賞することも出来ます。鎌倉でもっと時間をかけて色々見物したいのですが、私達に

は決めた予定があります。東京に戻る前に足を延ばして小田原に行きました。小田原城にも花菖蒲園があると聞いていたからです。午後遅く小田原についたので閉門前にお城に着こうと急ぎました。幸い時間に間に合い小雨の中、急ぎ足でこの再建された白壁の城とその庭園を参観することが出来ました。花菖蒲は城の曲がりくねった深い堀の中で細長く作られた畑に作られていました。堀を跨ぐ高い石壁にかかる朱色の橋の下、咲き誇る花菖蒲の有り様は薄雲のかかったこの時、正にこの世のものとも思えない程の美しさでした。



・・・小田原城の写真・・・

翌日の 4 日目は、わざわざ私達のホテルまで迎えに来ていただいた清水弘氏と共に過ごした一日でした。清水氏のご自宅を訪ねる前に、彼は私達に予期せぬプレゼントを用意してくれていました。私達は東京のど真ん中にある小林昇御夫妻の御自宅に案内されました。小林氏は彼のビルの屋上で浅鉢作り（盆栽風）の花菖蒲の名人です。又、熊本式室内飾りという特別な展示方法についても教

えて頂きました。金屏風を背に赤い絨毯を敷き、黒の台板に一輪咲いた白花・色花を交互に配置する熊本式展示方式です。日本花菖蒲協会発行の『世界のアイリス』に、この方式でも催されたお座敷観賞会の写真が掲載されています。小林御夫妻のおもてなしを受けた後、私達は東京の南西方向にある清水氏のご自宅に向かったの長い道のりとなりました。清水氏と妻の洋子さんは清水氏が生まれ育った家に住んでおられます。彼のお父様も園芸愛好家だったので日本の標準的住宅に比し十分に広い土地を所有しておられ、清水氏の花菖蒲育成の情熱に充分応えられる広さです。温室には彼の収集にした貴重な野生種が収められていました。又、彼はノハナショウブの自生地から集めた変異品種のコレクターでもあります。花菖蒲（ハナショウブ）は日本・中国北部・シベリア等に自生するノハナショウブを収集・交配・改良を数世紀に亘って繰り返して作り出された品種群です。清水氏の好む花は大輪の品のないものではなく、すっきりとした花形のものだそうで、キショウブとハナショウブとの交配により作り出された“アイシャドーアイリス”の開発・育成者として特に有名です。2008年のシドニーの展示会で私が“アイライナー”と名付けてみた下の写真の品種は“アイシャドー”でした。週の内5日は医療技術者として東京での仕事に出掛ける清水氏ですが、妻の洋子さんの話ではその他の時間は全て彼の愛する花菖蒲のため費やされているとのことでした。とても暑い午後遅く、御夫妻は車で20分程で行ける町田薬師池公園に私達を案内してくださいまし



・・小林理事の奥様・・

た。そこにも広大な花菖蒲園が広がっていました。当日は日本花菖蒲協会の要人御夫妻の歓迎を受け、御自宅・庭園を拝見出来て本当に有意義な一日でした。

次の日（第5日目）、



・左から ダイさんバーバラさんマフィさん・

私達は京都に向かうべく新幹線にりましたが、途中で世界的に有名な加茂花菖蒲園を訪ねなければなりません。掛川駅前では土曜日にもかかわらず加茂花菖蒲園行きのバスが運行していないことを知り止む無くタクシーにりました。伝統的な木造りの入口で切符を買い、花菖蒲や様々なガーデンニング関係の小物等を並べている棚の薄暗い列を通り抜けると、そこには目もくらむような色・色・色で満ちた空間がありました。数百人のあらゆる年齢層の人達がこの驚くべき光景の中に居ました。大きなレンズのついたカメラで慎重に狙いを定めているカメラマン達、花の間近でスケッチに取り組んでいる人々等で一杯でした。数千個のポットが配置された水面に渡された敷板で造られた通路を人々は行き交っていました。正にここは日本の花菖蒲展示の最大規模の場所でした。

太陽が容赦なく照り付けていたので、私達は休憩所で一休みせざるを得ませんでした、そこも



・・・加茂花菖蒲園の写真・・・

又、多種多様な花々の色で満ち溢れていました。飲物・食べ物・アイスクリーム等を販売している巨大なガラス張りの建物では、数百人分のテーブルが用意されており、頭上には途方もなく多くのハンギングバスケットが咲き乱れ、テーブル・椅子以外のスペースには、これも満開のベゴニアの鉢が置き並べてありました。まさに花々で演出された豪華なショー舞台の上に居る心地でしたが、私にはいささか飽食気味の気持ちでした。

日本の便利な鉄道網のお陰でその日の夕方、私達は京都に着き新しい宿に入りました。私達の京都での主目的は平安神宮の花菖蒲園見学ですが、その名の高い歴史的な京都の街をぶらつくのも楽しみでした。哲学の小径を散策したり、生垣のすき間から優雅な個人宅や寺院の庭をのぞき見したり、狭い小道をたどってみたら、伸び放題の樹林に囲まれ苔むした狛犬の像がある古い社を見付けたり、群衆と共に神社の田植え祭りを見物したり、最古の禅寺である建仁寺の簡素な石庭や玉石、完璧に配置された植え込みなどの様式美に圧倒されたり、錦市場を探索したり、口の中ですり潰してしまうような豆腐料理を見つけたり…。まさに京都でのこれらの体験は今までに味わったことのないものでした。(中略)

朱色に輝く平安神宮は京都が日本の主都として定められた1,100周年を記念して、1895年(明治28年)に創建されました。神社の背後には美しい泉水や池が広がり、沢山の鯉が群がっていて、子供達が餌をやったりからかっていたりしていました。池辺に沿って花菖蒲が群れ咲き、よく仕立てられた楓、松、藤などの植栽で典型的な日本庭園を形作っていました。京都府立植物園では花菖蒲はやはり水辺に植栽されていましたが、隔離された木立の一角に自然のまま植えられている感じで、水面に映える花菖蒲の姿は更にいっそう美しく見えました。この一角は隔離されているため、私達はそこを見つけるのに苦労しましたが、ここが私達の素晴らしい旅の最期となりました。

今回の旅で実に多くの忘れがたい体験をしまし



・・・京都府立植物園の写真・・・

たが、それらは全て書き尽くすことは不可能です。大きな発見の一つは花菖蒲が日本では歴史的文化的重要性を持っていることでした。日本では多くの人が個人の庭園を持つことが出来ないため、初夏に満開の花菖蒲を見に出かけることは年中行事の一つであるということでした。私達は自分の庭があり、そこで花菖蒲を育てることを諦めてはいけなかったと思います。花菖蒲は私達に“冒険”のテーマを与えてくれました。今回の日本での体験こそ、私達3人の最も大きな冒険でした。ご一緒いただいたダイさん、マフィさん、貴重な時間をどうもありがとうございました。

付記：このエッセイに登場するオーストラリア・アイリス協会の女性3名は2008年6月上中旬に来日されました。彼女等は当協会役員である小林昇氏宅の盆養作りや熊本式室内鉢植え陳列に大変驚かされていたようです。小林御夫妻は故平尾秀一会長の時代から海外からのアイリス愛好家の見学を快く受け入れてくれ、その暖かなおもてなしに頭の下がる思いです。紙面を借りて、御夫妻に厚くお礼申し上げたいと思います。また、広島県在住の三輪昇会員には、立派な申し分のない和訳をしていただきまして誠にありがとうございました。(理事長：清水弘)